
平成 26 年

12 月の普及活動状況

ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

活力ある新産地づくり

中濃農林 ■ ゆず 他産地の取り組みをヒントにさらなる活発な活動を！

かみのほゆず(株)では、12月16日～17日、ゆず生産者をはじめ、ゆず加工部、関係機関の計11名が参加し、今年度2回目のゆず先進地視察研修会を行い、神奈川県相模原市の(有)ふじの、山梨県富士川市の日出づる里活性化組合の2ヶ所を視察した。



【ゆず園視察】

(有)ふじので、ヒット商品として定着したポン酢の開発について話を伺い、加工所で搾汁、果汁殺菌、保存までの流れを見学した。かみのほゆず(株)では、加工所移転を予定しているため、加工所を整備する際の参考となった。

また、日出づる里活性化組合では、大学生や一般の方を巻き込んだ「ゆずもぎボランティア」活動による収穫支援や、大手食品メーカーとの取引による販路の安定、収量確保のための栽培管理等について話を伺った。高齢化により収穫作業が難しくなったゆず園においてボランティアを活用する取り組みは大変参考になった。

農業普及課では、今回視察した2産地の加工施設やボランティア活用等をヒントに、上之保地域で取り入れられる取り組みについて提案し、(有)かみのほゆずの産地拡大に向けた支援を行っていく。

恵那農林 ■ クリ

剪定士講習会を開催！～低樹高・超低樹高剪定の技術向上・高位平準化のために～

12月5日、東美濃栗振興協議会主催による「剪定士講習会」が、中津川市内のクリ園で開催された。

当地では、樹齢に応じた3段階（「若木期」「成木前期」「成木後期」）の低樹高化で長期にわたり省力で高品質クリの安定多収生産を行う「低樹高・超低樹高剪定」技術が普及している。

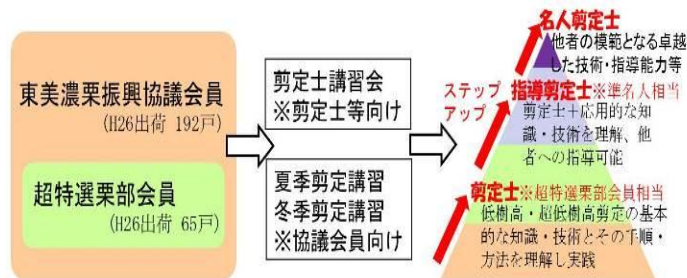


【「低樹高・超低樹高栽培」の移行模式図】

本講習会は、剪定技術認定制度のもと、3段階の技術水準（「剪定士」→「指導剪定士」→「名人剪定士」）で認定された剪定士等を対象に、テーマを毎年設け、技術向上のために実施している。今年度は29名が、若木の剪定をテーマに普及指導員から実技指導を受け、また参加農家皆でグループ演習等を行った。



【講習会での実技指導】



【「剪定技術認定制度」仕組み図】

講習会に参加した剪定士等は、後日実施の各地区剪定講習会での実技講師として一般農家への指導や、剪定作業が困難な農家に対しては受託作業も行うなど、農家自らが剪定士資格を活かした技術指導・労働補完の場面で活躍している。

農業普及課は、剪定士等の技術向上・高位平準化のための指導や資格認定審査等、本制度の有効運用支援を行っている。

飛騨農林■宿儺かぼちゃ 「飛騨高山食の匠推進協議会」が開催される

12月16日、宿儺かぼちゃ研究会、イオンリテール株式会社、JAひだ、高山市、岐阜県で組織する「食の匠推進協議会」の運営会議が開催され、今年度の各機関における取組みと来年度の方向性について協議を行った。

イオンリテールでは、宿儺かぼちゃの加工品として昨年度から販売を開始したプリンに加え、今年度はパンやかき揚げにも取組み、加工品の販売額が青果分を上回ったこと、販売量が青果を含めて45tとなったこと等の報告とともに、来年度は50tを目標に販売したいとの提案があった。

農業普及課からは、今年度は8月の長雨による地上部病害の多発状況や有機質肥料試験の結果等を説明するとともに、次年度に向けた病害対策と栽植密度の改善等による単収向上対策について提案を行った。

宿儺かぼちゃ研究会では、すでに打ち出している新たな栽培者の掘り起しに向けて努力するとともに、以前の疫病多発前の水準である出荷量 200t 台までの回復を目標に、各機関が連携して取り組むことが確認された。



【来年度の方向性を協議】

売れる農畜産物づくり

岐阜農林■祝だいこん 正月向け出荷始まる

年末の押し迫った12月21日から関西地方の正月商材である祝だいこんの出荷が始まった。今年度は、種遅れや低温の影響で栽培に苦勞した年であったが、生育後半のトンネル被覆対策で、ほぼ昨年並みの太さと長さを確認した。農業普及課では、12月18日の目揃会において、今年度の気象経過や生育調査結果、トンネル被覆の推進、新たな出荷規格の厳守等を指導した。



【目揃会の様子】

可茂農林■堂上蜂屋柿 高級干し柿「堂上蜂屋柿」の出荷始まる

美濃加茂市の特産で「味の箱舟」や飛騨美濃伝統野菜に認定されている高級干し柿 堂上蜂屋柿の出荷販売が、12月15日からJAめぐみを通じ始まった。

農業普及課ではJA、市と連携し、原料となる柿の栽培や干し柿加工、出荷販売に関して、幅広く支援活動を行っている。生柿栽培においては、大玉・高品質生産を目指し現地栽培講習会を、加工においては加工技術の平準化を目指し、加工マニュアルの作成を、出荷販売においては従来の箱詰めからコンテナ出荷切替えや木箱から紙化粧箱への変更等、大幅な出荷体制の変更に伴う出荷基準の作成等の支援を行ってきた。

また、生産者は高齢者中心のため今後の生産量確保が懸念される中、新規担い手の確保を目的に「堂上蜂屋柿・柿塾」をJAと連携し開講し、初心者を対象に栽培・加工講習会を行い、本年は延べ5名が参加し、熱心に受講した。

本年は、原料となる柿が8月以降の日照不足や降雨の影響で、大玉になったものの軟化が発生し、平年並みの数量となり、干し柿加工においては12月以降の天候不良で歩留りが心配されたが、当初予定よりやや遅れたものの、例年通り高品質な製品に仕上がった。



【美濃加茂市堂上蜂屋柿振興会のみなさん】



【堂上蜂屋柿・柿塾】

1月14日には、技術向上とPRを目的に第25回美濃加茂市堂上蜂屋柿品評会がシティホテルみのかもで予定されており、一般公開も行われる。可茂農林事務所長が審査委員長を務める。

多様な担い手の育成・確保

西濃農林 ■ 担い手育成 **地元農業高校生が農業への興味・関心をアップ**

～大垣養老高校生の管内農業現地巡回学習会の開催～

12月5日、大垣養老高校生を対象とした、地元の農業者を訪問する現地巡回学習会を開催した。生徒の参加は1・2年生38名で引率の先生など関係者を含めて45名での巡回学習会となった。当日の学習先は、海津市、神戸町の米や野菜、畜産などの農家6戸で、訪問先の農家経営者から、直接生の声を聴くことで、大規模経営や先進技術に対し深く感銘を受けたようであった。



【施設野菜農家の話を聞く高校生】

東濃農林 ■ 担い手育成 **土岐市濃南地区で集落営農組織について検討**

土岐市濃南地区の鶴里町柿野地区集落営農組合は、任意組合として設立し1年半が経過した。現状、経営面積は小規模ながら設立後に農地中間管理事業が始まったこともあり、法人化の是非が課題となっている。そこで、12月11日の定例会議で、農業普及課から法人化の推進について情報提供し、推進方法やメリット等について理解を深めた。結果、直ちに法人化に取り組む方向ではないが、引き続き検討していくことを確認した。

また、土岐市曾木町では、今年度初めから地域組織(SSK)で集落営農について検討している。12月9日の検討会議においては、曾木町の農地を守るために集落営農が不可欠であり、平成28年度を目標に農事組合法人を立ち上げることで意見統一された。今後は集落への説明会を開催し、関係機関で結成した集落営農支援チーム員により継続的に支援していく予定である。



【鶴里町での定例会議の様子】

下呂農林 ■ 新規就農者 **下呂市でしか教えてくれない農業研修会を開催**

下呂地区指導農業士会は、12月12日に下呂地域担い手育成総合支援協議会との共催により、新規就農者や農業研修生28名を対象に「下呂でしか教えてくれない農業研修会」を開催した。

指導農業士が自らの体験から得た経営のコツなどを披露した他、農業普及課からは、「水稻除草剤で雑草が枯れて稲が枯れない理由」と題して講演を行った。

今後は、年度末までに3回開催し、幅広い分野での知識の習得を支援していく。



【農業研修会の様子】

農業経営課 ■ 畜産指導者

将来の産業動物獣医師の養成をめざして ～大学生を対象に講習会を実施～

12月12日、産業動物獣医師の育成・確保対策の一環として、岐阜大学応用生物科学部共同獣医学科において獣医学科4年生31名を対象とした家畜別講習会が開催された。獣医師の資格を持つ農業革新支援専門員が、家畜衛生行政、食品衛生行政、養豚獣

医師の業務及び豚の病気予防等について解説を行った後、愛知県農業共済組合の獣医師が畜産情勢及び開業獣医師、農業共済獣医師の業務等について説明を行った。

食品の安全性に対する国民の意識が高まる中、農業共済団体、開業獣医師等、全国で4,500名程度の産業動物診療獣医師が活躍しているが、高齢化が進む一方で新規参入は新卒学生の1割にも満たず、産業動物診療獣医師は慢性的に不足する状況にある。

講習会では、診療技術の研修や公務員の受験等について活発な質疑応答が行われた。



【家畜別講習会の様子】

魅力ある農村づくり

揖斐農林 ■ 地域おこし

沢あざみ生産振興大会 ～春日の沢あざみから世界の沢あざみへ～

飛騨美濃伝統野菜である沢あざみは今年8月、スローフードインターナショナル（本部イタリア）から、食の世界遺産ともいわれる「味の箱舟」に認定された。これを受け揖斐川町春日沢あざみクラブは12月19日、生産者、加工品などの販売者、地元住民、関係機関職員等に認定を報告するとともに今後の生産振興を目的として生産振興大会を開催した。



【「味の箱舟」認定の報告】【所狭しと並んだ料理】

大会では、これまでの取り組みや経緯の説明の後、栽培研修を実施し、さらに各団体が調理した沢あざみ料理を試食した。煮物、惣菜などの伝統的な郷土食、おやき、コロケ、沢あざみパウダーを練り込んだ米麺、ケーキ類、女子大生の感覚を活かした「沢あざみ餃子」など、バラエティに富んだ料理が並んだ。

農業普及課は栽培研修を担当し、栽培暦の説明をした他、春日地区の他食材や山菜・薬草類にも視点を当てた地域おこしを提案した。

郡上農林 ■ 地域農業活性化

地域特産品づくりに関する普及活動成果を発表

12月6日、白鳥文化センターで開催された郡上市農業振興大会にて、「地域特産品づくりによる地域農業の活性化」と題して普及活動の成果を発表した。

山菜王国郡上づくり運動に取り組み10年以上が経過したが、耕作放棄地の活用と鳥獣害対策の一環として新たに取り組んでいる地域特産品づくりの事例を紹介した。

耕作放棄地を利用したフキやエゴマ栽培、土地利用型営農組織によるタラの芽のふかし栽培について、身近なものに感じられるよう、栽培を始めるきっかけや栽培方法、実際の生育経過を紹介した。

現在、これらの品目の需要は拡大しており、今後も規模拡大や新たな生産者の確保等について取り組んでいきたい。



【発表の様子】